

第 15 回目 私たちは神の作品

〔聖書箇所〕 2 章 7～10 節 【新改訳改訂第 3 版】

- 7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。
- 8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。
- 9 行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです。
- 10 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。

● 訳文には訳されていませんが、8 節と 10 節に理由を示す「接続詞」の「ガル」(γάρ)があります。接続詞は前文と後文がどのようにつながるのかを決定する意味で重要です。「文章は接続詞で決まる」のです。

はじめに

● かつては霊的に死んでいた者が、キリストとともに、キリストにあって、「生かされ」「よみがえらせ」「(天の所に) 座らせられた」こと、ここに神の全能の力が働いたとパウロは述べているのです。特に、「座させた」ということばはエペソ独自の表現で、私たちの救いを考える上でとても大切なキーワードであることを先に述べました。それはつまりキリストを信じることによって与えられる立場です。さて、今回は、「キリストによる救い」をパウロは別の表現で言い換えています。パウロという人はある真理を言い表す場合に、一つの表現ではなく、言い換えて表現をする天才ですが、それによれば、「キリストによる救いとは、私たちが神の作品として造られたこと」だとしています。そこで「**神の作品**」ということばに込められた意味、それは何かを考えてみたいと思います。

1. 神の手作り(ハンド・メイド)による作品

● 第一に、「神の作品」が意味するところは「神の主権による作品」だということです。「作品」ということばをギリシア語で「ポイエーマ」と言います。このことばは誰かの働きによって生み出されたものであればなんでも「ポイエーマ」と呼ばれました。子どもが小さな紙で折り紙を作れば、それはその子どもの「ポイエーマ」ですし、誰かが建物を建てれば、その建物はそれを建てた人の「ポイエーマ」、だれかが絵を描けば、その絵を描いた人の「ポイエーマ」、だれかが論文を描けば、その論文を書いた人の「ポイエーマ」となります。

● 今日、著作権ということがとても問題にされています。かつてに音楽でも写真でも、映像でもコピーすること

אגרת שאול אל האפסים

はできないのです。なぜなら、一つ一つがそれを作った人の「ポイエーマ」であり、大切な知的財産として認められるようになってきたからです。つまり、許可なくコピーすることは盗みの罪とされるようになってきています。日本で翻訳された聖書では「神の作品」となっていますが、英語では God's masterpiece となっています。この masterpiece とはオリジナルなもの、一つしかないもの、コピーとして造られたものではないもの、特別な、ユニークで、質の高いという意味があります。Master-key という言葉がありますが、それは親鍵です。コピーしたものではないもとの鍵という意味です。コピーした鍵からさらにコピーした鍵を作りますと、だんだんと合わなくなってしまいます。ですから、決して無くせない大切な貴重な鍵が「マスターキー」です。

●この世には、同じ規格の製品を大量に生産して売られていますが、そうした製品とは全く異なるものに、「神のマスターピース」(God's masterpiece)があります。SMAPのメンバーが登場するTV番組のエンディング曲として流れてからヒットした歌で、「世界に一つしかない花」というタイトルの歌があります。その歌詞は多くの人々の心をとらえました。その歌詞にこめられたメッセージは、私たち一人ひとりが「オンリー・ワン」の存在だということです。以下、その歌詞を引用してみます。

(1 節)

花屋の店先に並んだいろんな花を見ていた
人それぞれ好みはあるけど どれもみな綺麗だね
その中でだれが一番だなんて 争うこともしないで
バケツの中には誇らしげに しゃんと胸を張っている
それなのに ぼくら人間はどうしてこうも比べたがる?
ひとりひとり違うのに その中で一番になりたがる
そうさ ぼくらは世界に一つだけの花
ひとりひとり違う種をもつ
その花を咲かせることだけに一生懸命になればいい

(2 節)

困ったように笑いながら ずっと迷ってる人がいる
頑張ってる花はどれも綺麗だから仕方ないね
やっと店から出てきたその人が
抱えていた色とりどりの花束と嬉しそうな横顔
名前も知らなかったけれど あの日はくに笑顔をくれた
だれも気づかれないような場所で咲いてた花のように
そうさ、ぼくらも世界に一つだけの花
一人ひとり違う種をもつ
その花を咲かせることだけに一生懸命になればいい

(サビ)

小さな花や大きな花
一つとして同じものはないから
No.1 にならなくてもいい
もともと特別な Only One!

●この歌で強調されている部分はさびの部分です。最後の「小さな花や大きな花、一つとして同じものはないから No.1 にならなくてもいい。もともと特別な Only One! 」です。この Only One の歌の一つの問題は、私たちが神によって造られた存在だからということが、全く抜けて落ちていることです。同じものはないという意味で、貴重価値があるのだと主張していますが、この世はそうした価値を認めず、電化製品のように同じ規格として扱い、あるいは、どちらが優れたものか、劣っているものか判別してしまうことがまかり通っています。幼稚園での運動会やお遊戯にしても、先生方は子どもたちをみな違った花のように思えても、子どもの親たちにとっては、自分の子どもが他に比べて一番なのですから……。そこには、子どもの著作権が親自身にあるかのようです。生けるものすべてに神の著作権を認めなければ、真の意味での masterpiece としての価値を人々が認める

ことはこの世ではないのです。ですから、若者たちが人を人とも思わない犯罪が横行しているのではないのでしょうか。「私たちが神の作品」であるということは、神がキリストを通して、私たちをこの世界で文字通り、神にとって大切な、貴重な、しかもユニークな存在として、神が主権をもって再創造して下さったという点にあります。たとえ、人から愛されず、認められず、受け入れられずとも、私という存在に対してだれからも侵害されることのない著作権を持っておられるのは神ご自身です。神がその著作権を行使して下さるとき、私たちは誰によっても侵害されず、何ものによっても支配されることがなくなるのではないのでしょうか。

●SMAPの歌は私たち人間がもっているニーズ、つまり自分が大切な存在として認められたいというニーズを表している歌と言えます。しかし、そのようには認めない現実社会があります。親や周囲の人々がいます。そして自分もそのひとりかもしれません。私たちが神の作品であるということに目が開かれない限り、どんなに自分が大切にされたい、愛されたい、受け入れられたいと願ったとしても、それが確実となる保証はないのです。その意味では、私たちが「神の作品」であることは、「救い」と同義なのだと思います。

2. 神の愛が込められた作品

●先ほど「作品」ということばはギリシア語で「ポイエーマ」だと言いました。だれがか造った結果、生み出されたものはすべてその人の「ポイエーマ」、つまり作品であると。しかしこの「ポイエーマ」は、次第に芸術作品を指すのにも使われるようになりました。画家の絵や彫刻家の刻んだ像、作家が書いた文学的作品、作曲家が書いた曲・・・これらは「芸術作品」です。本来、芸術作品という場合、それによって生活が便利になるとか、お金を儲けるために作られたものを意味しません。絵画が投機の対象として売られたり買われたりすることがありますが、それは本来、作者の意図したところではないはずです。

●芸術作品と言われる場合には、その作品と作者の関係は特別なものです。自分の魂、気持ち、愛がそこに込められます。自分の作品には、特別な感情を抱くものです。

●私たちが神の作品であるという場合、そこには神の私たちに対する特別な感情があります。その感情とは、愛です。エペソ書 2章 4節にも、「あわれみ豊かな神は、私たちを愛して下さったその大きな愛のゆえに、罪の中に死んでいた私たちをキリストとともに生かし、よみかえらせ、天の所に座らせて下さったのだと記されています。このことをパウロは 10節で「私たちは神の作品」だと言い換えているわけですが、その作品に対する愛が注がれていることはいうまでもありません。

●パウロはこの 2章 3節～7節までに、神の愛の様々な表現を用いています。たとえば、

- ①「あわれみ豊かな神」
- ②「私たちを愛して下さったその大きな愛」
- ③「このすぐれて豊かな御恵み」
- ④「私たちに賜る慈愛」
- ⑤「恵みのゆえに」

אגרת שאול אל האפסים

●私たちがキリストにあって注がれている限りなく豊かな愛、いつくしみ、豊かな恵みの結晶が「神の作品」ということばに込められた意味です。単に、一つしかない貴重な存在だから、希少価値があるからというだけでなく、その作品にこめられた、異常ともいべき愛の対象が神の作品という意味なのです。その神に私たちの目が注がれるとき、月が太陽によって輝くように、私たちも輝きはじめるのです。その輝かせる力を人からもらおうとすると、私たちは失望する運命にあります。人からの評価や称賛ではなく、自分が神の限りない愛によって愛されている特別な存在であることを信じるのが輝く秘訣ではないでしょうか。

●ですから、「**私の目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している**」(イザヤ 43:4)という神の無条件のラブコールを毎日聞きながら生きることが大切です。

3. 神が目的をもって作られた作品

●さて、「私たちは神の作品」であるという言葉が意味する三番目のことは、神がある目的をもって私たちをキリストにあって造られたということです。もう一度、10節の聖書のみことばを読んでみたいと思います。

2:10

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエス にあって造られたのです。

神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。

●ここで神がどのような目的で私たちを作られたのが、その目的が記されています。その目的とは、私たちが「良い行いをするため」、あるいは「良い行いに歩むように」、しかも、その「良い行い」ができるように、その力や知恵をあらかじめ備えて下さっていると。ここでの「良い行ない」とは私たちが考えているものとは異なります。神の基準による「良い行ない」です。ちなみに、「行ない」と訳されたギリシア語は「エルゴーン」()ですが、行いの他に、「働き、仕事」という意味もあります。「キリストのからだ」という概念からすると、「行い」という訳よりも、「働き」の方がふさわしいように思います。

●この節にある最後の「あらかじめ備えてくださった」とあるということは、この「良い行い(働き)」をする上で、あなたが特別に自分で頑張ったり、自分の努力でしようとしたりすることは必要ないということです。この目的を実現させていくためのすべての導きと能力は、すでに神が備えて下さったと約束しているからです。どこに備えられていると思いますか。それは、天の所です。ですから私たちがすべきことは、その天の所に「座ること」です。天に「座る」ことで、はじめて「歩み」ができ、敵に対しても「立つ」ことができるのです。そうした前提をもって、「良い行い」がどういうものかについて考えてみましょう。

●特に、挙げられている「良い行い(働き)」とは、すべて神とのかかわりにおいてなされる生活です。単に、Only One としての存在ではなく、かかわりにおいて自分がなすべき働きが備えられているということです。

<p>「良い行いをする」 「良い行いに歩む」とは</p> <p>(1) 4章1節以降にあるように、</p> <ul style="list-style-type: none">① 召しにふさわしく歩むこと② 愛のうちに歩むこと③ 光の子どもらしく歩むこと④ 賢い人のように歩むこと	<p>(2) キリストのからだである教会が 建て上げられること</p> <ul style="list-style-type: none">① 一つ一つの部分はその力量に ふさわしく働くことによって② 備えられた結び目によって、 しっかりと組み合わされ、結び合 わされ、愛のうちに建てられる
---	--

●たとえば、「召しにふさわしく歩む」とは、神のご計画があらかじめ定まっていることを信じて、他者と平和の絆で結ばれて、御霊の一致を保つ生活です。それぞれの違いを認め合いながら、共にキリストの背丈にまで成長していく生活です。互いに真実を語り、徳を高めて行くような生活です。人の罪を赦し、愛していく生活です。それはみな、キリストのからだである教会を建て上げることにつながります。これらはすべてが密接につながっています。からだ全体がひとつのからだとして機能していくためには、からだを構成しているすべての肢体が、かしらなるキリストとしっかりつながっている必要があります。

●今日は、キリストのからだを建て上げるという神の目的のために、私たちは神によって造られた作品であるということに心に留めたいと思います。キリストのからだにつながることによって、私たちの信仰がひとりよがりにならないで、健全な成長を遂げることができます。ある意味では、「教会の外に救いはない」ということが言えます。この教会とは、奥義としての教会で、ユダヤ人も異邦人もキリストにあって新しいひとりの人になることです。そこではすべての人間的な善悪の基準や隔ての壁となるものさしも捨てなければなりません。キリストのからだを建て上げるという目的は、神の夢であり、神のヴィジョンです。その目的を実現すべく、私たちが選ばれたのです。**神の栄光は、キリストのからだなる教会を通して現されることを、神があらかじめ計画されたからです。**ですから、キリストのからだを建て上げるとは、神ご自身の家を建てることと同義です。その家は別名、天の御国(王国)です。それがどういうことかが、エペソ人への手紙の重要なテーマとなっているのです。私たちはこのエペソの教会に宛てられた手紙を通して、もっともっとそのことを考え、そのために自らを神にささげて、神の期待に応えたいと思います。